

用捨箱

中



三一八

小泉



用捨箱中之卷

柳亭種彦編

一 候鶯くひ

昔行を次第小ちをあけとひ事と。候鶯くひはやうをあけとひ者多かりが近年へ
稀ふ事。適の者も其縁故へ解くきるもゆるやう。是昔の女のえみにべくかと
只事多くゆくもきら次第あせても讀へ故をれを云やう小をあけとひ意焉

季吟十會集 寛文十年刻

つねめち歌の教向に源うゑや 水怪

當時の寛文書牋とんせん料をき模へかまう。ばくべくの小物もまのの女とひーを
りて此譜寛文前よりありと知べ。室曆済の輕口話ひべくひと人ふまんれそく
云女語ひべくひ筆うせぬ出くひくひの讀うべと思ひ其側ひくひ鶯くひと
又云て再慶思ひべくひを若竹やむ事りやと又傍ふ。ばくべくひ書牋損の外
ぐくのぞ隣座ひべくひ賜のひべくひが本のひべくひ本隣座ひべくひと書くひうを。
此話をりて昔ひべくひを多くお方を思へべ。今も童のを聞ひ昔がくの文やを
わざま通用の文ひ稀う譜もべくひ絶うをべ

西山十百韻 寛文年間宗因独吟

莊老の胸 よう空の霧 晴て

莊老学者の見識や芳野の花もゆきう次第とりひきだすある鶯一

類柑子 其角文集

享保四年刻

前句略

り や竹 す

柿 梅 南盛

享保の頃の書

新見

此句も竹串へゆきより不辛病を發す紙りひ一あり

二 高燈籠

昔々物語
翁著小
廿日ハアキタ死マリ去マリく其年アキタ七月シナウニ高燈籠タカテングとト小物コモノをミムるミム七
回忌タマツでたタマツもタマツり立タマツやうタマツ六月シナウニ晦タマツ日タマツ長タマツさ五六間タマツ杉イ丸タマツ上タマツ手タマツ用タマツのタマツをミムるミムを
結タマツ杉イ葉タマツをミム包タマツ四手タマツをミムらタマツ付タマツ燈タマツ籠タマツにミム过タマツ番タマツの行タマツ燈タマツの形タマツ小タマツちタマツ作タマツ上タマツひタマツき
下タマツ手タマツ斧タマツ屋根タマツ板タマツそミムらタマツ玄タマツ間タマツとミム墓所タマツの間タマツ廣タマツとミム建タマツ七月シナウニ朔タマツ日タマツより
晦タマツ日タマツ毎夜タマツ若タマツ六タマツツタマツ明タマツ六タマツツタマツをミムりとミム一向タマツ宗タマツ少タマツ見タマツえタマツ他タマツ少タマツもタマツあく
如タマツ比タマツ乞タマツ少タマツ有タマツりタマツとミムり是タマツ享保十八年タマツ小記タマツされタマツれタマツれタマツばタマツ既タマツ小當時タマツ在タマツ家タマツの
高タマツ燈タマツ籠タマツの絶タマツ高タマツ燈タマツ籠タマツの明タマツ高タマツ燈タマツ籠タマツの頃タマツをミムりミム一タマツ秋タマツ知タマツ少タマツ考タマツへ合タマツまミム草タマツ紙タマツ
未タマツ見タマツるタマツ師タマツ宣タマツ々タマツ画タマツ本タマツ小圖タマツりミム左タマツ摸タマツき

俳諧タマツ世男タマツ延タマツ杉タマツ並木タマツ又タマツ六タマツツタマツ為タマツ高タマツ燈タマツ籠タマツ似タマツ春タマツ

。在タマツ家タマツのタマツ燈タマツ籠タマツとミム證タマツ少タマツ見タマツれタマツどタマツ杉タマツの葉タマツをミム包タマツとミム合タマツせタマツ。

此画本タマツ元標タマツの年号タマツの後タマツ小題タマツれタマツ也タマツ

貞享元年タマツの刻タマツるタマツべタマツ

画本月並の遊び

頭タマツ書タマツ小云タマツ前文略タマツ

玉祭タマツでタマツそざまタマツぐの珍物タマツとミムり
精藍タマツよタマツちタマツよタマツある老翁タマツとミムり大城
かげ佛名タマツをミムりかげタマツむおり
迎タマツき頃タマツじタマツり佛タマツ火タマツ
三年タマツのうちタマツ燈タマツ籠タマツとミムれタマツ

たタマツさタマツろタマツもタマツ
見る人の目タマツ乃タマツうそ火タマツかタマツ



今も死亡者ある家を七月軒へ燈籠をかうハ此余波を高燈籠も二年が限る
風俗あり故七日忌までたゞもゆどと廿日物語ふうとられ一ある處
ニ用ひらうを結四弓をさして付る事と總老人の記さき一ふ此画よく合意と
吉原玉屋山三郎が家を新精靈あらかをも海年も燈籠をひす事今小絶を在幕小
供事あるは彼家のものと云ふと亭りより近年の碑子あそよをひす故の燈籠と云ふが一云

延宝五年刻

富士石

享保九年刻

金臺錄

吉原の灯をまほむる燈籠 欠 尺

延宝の匂ハ一人のくあがけ一在家の燈籠より享保の喉ハ山谷擣場よりの寺院
の燈籠より同様燈籠の匂も時代よりて見ざれば匂意の解がまき事あらべ

三 穴の菖蒲打

端午の日の印地打一夏一とくちを切とすり正保慶安の頃ハ此日専童のいごと

向うそひ事昔々物語ふうと。又其の名を切止て菖蒲打とるれど中古風俗志

明和元年ふ「享保の頃まで所の廣小路へ童集り菖蒲を大見る。かどきに打
老人筆記ふ「あらわきをも。もるきをも。もるきをも。もるきをも。」打
の繩をとらへ或の長竿等を持ひ往來の子供へあやめあくとひいて下座を若
下座をせざれば打かりもどして使ふつもくら小網市など重箱箱をとむる。なく
迹がひし事あらうと今ハ絶てう」との事なり。さて此菖蒲うち絶て
後も吉原の本丸のまわり猶節の日江戸町方京町方と立別れ待合の街
かくて打合を見物群集あらう一が向やまちで癡をかうが一禿もゆりしろ
遂に止うちとの事平道^{揚屋町}能人^{あらわ}が彼地の事を集一雜記おほず一が手写一をさざる
まづふ平道没一と今ゆきわらふ便なり考証小備ふまき事ハ三二ツ見ゆ

上京樂^{享保十年己巳}

麥月月並集

端午 枝とよ陰系禿卷物や先 左十

又寛延元年吉原細見里の家名記の序より「初午ハ九郎助の湯仕舞上巳の京の次郎右衛門の事。五月五日ハ袴菖蒲。七月ハ銀紙。そのかまの故所を駆逐て牽牛奉り」と云ふ事を云ひれば平道が説の如くたりあるべ

因三事より是より十年の後宝暦七年七月細見の標題と「故つゝ」とよびても彼客の故をきりく七夕小奉ア一事の物語が故史其の序中「初又毎月七日の夜思ひてきの定故牽牛織女小奉り木の下にを待霄名月」と記して下か摸るゝ画なり今もさる事ありや不知

四 紙帳賣 紙子賣

龜鷹川

由廿日。夏近くあれど紙帳賣。冬ふれべとくと紙金と之物を

商ひ云々今ハまくる上巻小記を如く享保出生の老人の筆記。元又寛保の頃まで此商人の來り多べ。今ハ見世棚小盡賣の云れど其家もあやうく

富士石 延宝七年刻

雨晴て声りやまと一紙帳賣 宗也

向之圖 延宝八年刻

タ立やゆるダ中ゆも紙帳賣 立澤

二本とも江戸の集より延宝の頃ハ專賣來りし証と云べ。彼てもじとく紙金ハ紙衣賣が持きて。紙衣賣ハ京師の俳諧集ゆ見えり左下録を

誘心集 寛文十三年刻

種寛撰

冬 雜 引あぶや紅葉の錦紙衣賣 千之

隱裏 延宝五



時うる哉紙衣うる声初時雨重政

夕紅元禄十年刻

仙墓の淨瀬篠笠ん紙子賣花畠

此夕紅のとハ富士石と同調和撰少江戸の集よりされば紙衣賣ハ何處も
物事必せり廿の下人ハ紙帳と錫。紙衣を着者か不くし質素のさま紙
是を思ひやるべ一仙墓淨瀬篠笠の事へ下の巻より照所を看て見るべ一

五 金銀を伽羅との陰語

昔の俳諧ハ狂言か過二佛の中间となりけ釋迦を鎧持ふとす類今のいは
ざまよと異なり説林の俳諧調あらねばかもむきありて後世の文え雜あり

空林風葉

天和三年刻

笑ひ歌 加藤とよもや若夷季好

年若き

遊女をあらもあ詰うどひふらう若夷を遊み少りうらは是彼

釋迦を繪りちとすの類ならん。さて匂意と花街の陰語ふ金銀の事を
伽羅といふ。それをかりもぞやそそ笑ひ顔をうる歎とひそくるをり 吉原が三本

伽羅事

金太史 京田

あれ人へいくつて重ねてあらけやあきらめ
争ふ御のと男ふ金銀くまくまくまくまくまく
アゲテしまくは伽羅うくて本とさうやうの伽羅
くまくまくとひ男のとよいくれぞ月ハ伽羅かや
くまくまくのとあらわと一やうひととくまくまくと
あらわとバ伽羅の代とて金銀にりてくヌカドヒ
あれどもあらとひとくとく金銀のとくとくとく

伽羅卷 雜文

竹本藏書



とくのねと
そへて
すくらむも
金をなめ
うらみゆのひづくわ

金銀を伽羅となり語釋とお見えりはまし万治二年の印本あれを此隠

語いとす

空林風葉

寛文七
年印本
ハ京師の集あがくの花街をもらひ方を芭翁

吉原讃嘲記

寛文七
年印本

浦屋内せきあ西とく遊女と評ある詞あ「ある人の日は

人を炭黒といふ色の黒きああうとる。答て曰さやかにいはば君があれども人

伽羅を焼尼まとも心るべー」とゆづまく如く伽羅を焼つゝまく金銀をつる

つまもえ。又。吉原雀

寛文七
年印本

あをきの中源ふくらむる春のつうひそよせやのう

つまもえ。云「のれの筋も大くねり其日ひまつらかまうるがまつら小袖

をこびらそれくの分おあこがひ前方おからぶべー」又。其角の作

吉原源氏五十四君

頼

四年玉葛の茶ふ「此君ふつまて物語りのひ秋より冬ふうる頃うそよ田舎の金づく

さんうるがと風うそひつきりきさう味より西く程ふ。人をひいからまうふがえ

浅かるぬ心ざー奥見えをもあ持とおをなまう。さら伽羅の一炷とお蒲團の匂ふ

けぐるまることもかゝる源氏あらねば小袖へそりの時くされどもまろきり心がほだえ
るふじ事なり

吉原雀

出でて日あらう。といひふたてて日。を鼓持の異名え

さりうとひ心あるべー

此まうーふ笛人とあは是

かう

六 荷ひ風呂

延宝八年京師の記か述風呂云云とのふ事なりそれまめじく思ひふ水風呂を
前く持あやき事ありそれをハ荷ひ水風呂とくり川念佛元禄十一年刻一の卷小。ひとうの
法師あり四條川原ふ年ひそく住り云の条「二条の下家老間をかどひ一の
まうろきかまへり一器のゆつお盃のわらひを残す西のまうまふとて大津繪の阿
荪院孫翁あくをかけられとゆきそにれが念佛まうます中略川ふるまて流れ枯木を
ひああをのたまげとぞ。身ひきりば縄をを通る三文の荷ひ水風呂さかでとの事あり此
冊子の他まよ不見き見え洋服繪本のナリ傷ふげ事あり看板の矢やもみゆみるいゆくが
紫の一本和上野の花見の条ふ「物あこごと見るうちふ遺佚何處へ行ひゆり
見をも陶とうと身みと尋たずひきたまふりのるふくあまくへらけん大佛の後れ
くふくふ櫻の花盛りある其下ふ水風呂あらわとあくそくそ中へ花を入れて温泉水
あくそくふ浴ゆを洗ふとあく言づきとて垢くずをもとそまぢら。のまう悪さふ是る
氣き遣ひ方かたと人ひとを遠候とほ事こと歌うたとも

水風呂はあらあく思ふ花見が上野の山さんも入てあがえれ
りのものあらあくへりと書かへ文ふみの曲まきて若辻水風呂の彼かれがむじあくそくや
とくそくもゆれば如お此こあり人ひとなり

七 椿類蒸腊

慶友家集發久在翁集古写本

慶友

則ト養なま

万治寛文頃の吟あるべー

上野の風呂ぞ

聞きあらむ風呂も我立松たつまつ本もとうる

とくそくもゆれば如お此こあり人ひとなり

今いまの少女めのわらわ何なんもゆれ花はなのりうるを而ひて頬ほのまへ額ひだりへ唾つばを押お戯はれをまること

物り是へ頬紅をつけ、頃そのまろびをうるが頬紅廢れ後も童あそび
のとひを落子の皮をはか合て鍔將をつけらるまろびをもる類あり

花かく

享保十四年刻 常陽撰

草足袋賣の帰るアリ 素流
頬紅も額も椿蜜りあみ豆花

續清鉢

延享二年刻

犬の尾巴本曾も花と愛せ 摂千翁不角車
誰惚かす 椿頬庵小善角

椿の艶頬紅ふ似る故此獻れあの花ふ起すや落べ。又水訓棹と題集
も千羽撰もその集ふ「花待ふそれヶ金持」とひくふ似合かと袖留前
茄子漁船と附言ゆり。椿頬紅。茄子鍔將。乞き附多。さて頬紅のあくねえ

する事漢史壽陽公主の梅花粧の事。和少。菅家の初き頬緑せめにゆり
と。梅の花笠の色ゆも似るゝと云ふが頬あもくべうけのとふと
延宝年小引されても此序歌の出所を知づれば證となりがごとくされど和名
惟中著ふ引られても此序歌の出所を知づれば證となりがごとくされど和名
抄小「絆粉。釋名云絆粉。和名用途絆赤也。染使亦貯著頬也」といふが
古くよりあやし一粧ひきの論也。契冲曰。角与保と通む頬丹平此説ふよれが因
述の頬小著るより出一名す。又廢れたるなり近一後院別當の卷ふ「予が弱

年の貯享保の頬もで婦人の顔と粧ふお頬紅とりひて白粉をぬくと後紅と白
粉を交て薔紅色ふてそれを頬つけ端を散へり。如式されば顔色麗く
矣。元文の初の頃より貴賤共小頬紅を止て白粉などを薫くゆり或白粉を
ぬくゆもゆり何故如がまるぞと人ふ問ふれば遜女の粧ひを似もるうりと云ふとこれ
バ當時の遜女の素顔をなとあるうり此事の絶するべー今ひ沙前とく

ものを書きても假面つづても頬を赤く隈せる此余風ぢり

八 涙法師名法師

人を嘲りて法師と云ふ又傍發意とも。凡虫と云ふ通ふ鄙畜出。おとん
坊の類種々ゆゑり桜ちよ此俗語多くよりなり 散木奇歌集連歌の部

十月在り月のあからなる夜四条の宮小ちよりて女房うち小物語して
所そびる係小僧よもぞあらわのあけまばまじこりける

か不空のぬまどやうーとありふけり

おされもうやと顔小かる

柳亭曰附めいの俊頼卿入

涙法師ハ今ひ泣出。時雨を泪みさる。大空へあき思ふ事うとのこぼりあり
大永二年の茶の俳諧小

又 宗長寺記

前句 般若寺坂乃大を食す

心もみせち 鹿ん湯や 文殊院

般若の智惠の事免バ文珠。乞食小せち 鹿ん湯の四ツを附り 下学集 小
世智辨 世俗情惜之義也」とゆればせち 鹿ん湯則今ひあらん湯を惜者

と乞食のやうなり。乞もひ一故小か附言事く知り。又我子は法師と
尔是は他小對して單下の約より 御隨身三上記 年正九 翻日御廻事と産ひあり

公處目生度。顧者るよ。上意を拂ひ是は小法師。九日夜半をより誕

生ひきを私活出の事。と仰る。記者ニ上。其男男子をまきよ。あらび私
公の戯れてのまひ一事を記へ。あり 同書 小才法師。誕生く後。有兩種。荷

云々。二郎と云ふ男子。ゆる。は私小見え。故。家。法。師。と。云。又。彼。の。狂。言。老
我。子。の。事。を。う。ゆ。法。師。と。云。桜。ち。よ。鎌。の。や。う。お。冷。し。狹。穴。筋。の。や。う。お。瘦。し。ある
やう。あ。ぬ。女。を。鎌。娘。も。も。り。天。神。の。毫。す。み。ハ。潤。澤。も。う。艶。も。う。因。も。私。貞。女。

譬へる如く某法師の瘦法師と云ふ事より先達の説ふ件の字より
子と云ふ義ある。やせられの上略るんと。されば某法師もせられも同意。瘦法師
やせら發意。瘦傍とも通じる爲め例多し。今男子のことを多き瘦傍と云ふ是多し。他
よりか瘦様といふ事うそあれば彼等よりこそ此類の俗語ひと多し。大を發意を大
男を謗りたりこそす法師の反対あり。人影を影法師と云ふ黒くうそり
あるが故ゆ。物を穿られ難き事より余所をぞ見ゆる者とつんとして居とひふ。龍耳
とつん傍とは是多し。何事をうそとも遂ぐる者を二日傍主と云ふの主の字を添
瘦法師。脚好と云ふ誇も僧の事あひゆ。瘦發意の癖ふ瘦ると云ふ脚と好む
を嘲るあり草稿あひよが見出へ限界を書のせとぞきよる讀人の倦怠を
おそれ其うち二つと次の条記を

九 掃地坊

潔癖の事を掃地坊と云う奇麗好ふ過ゆるを例の嘲とぞなり

境海草 万治三年刻

心かゝる花の躰あや掃地坊 長治

煤拂

煤拂 あや 手も

空林風葉 天和

伯耆吉谷所

大山

大山や雪道分る 箕帶 坊 一 雪

掃地坊と云ふ事今へりをざる秋葉市坊も同意あら爲し

十

さちめん傍

さちめん傍を振と云ふ事今へり桜並木をちめく傍をそー 節用集 小迷
曉と云ふも狼狽の字より當らぬ。さちめん傍がうそと云ふ程のまことひを今

振き立たて振き立たて振き立たて事ことう或もハ傍そばを棒ぼうと思おもひ物ものや生うりて後あとふ添そなへての歎かな未考みかう

洗濯物大盤

寛文六年刻

重撰

太和寺 夕立小豆らめんだらめんをある野のうる 松翁

浮世の北 元禄九年刻 可吟撰

夕立や こちあんや す門の 麥 黒 太

立ちたちハ 樟さくらあり。めんをうる。麵棒めんぼうあり。樟子さくらのこを 麵めんとつらうより出だ一組いっしゆとらふ附會ふくゐの
說説寛文前かんぶんぜんふのや ひやちひやち故ゆゑふのうとりひひ 行脚文集ぎやくぶんしゆ 三平風さんぺいふう 菩ぼ提悟ぼだいごと書か立たつ
驕きようぐ事ことと。又 姥搗おひらき 小こあとの路銀ろぎんの残のこりあまき 狐きつね俄かく小こあまきこれでかうく
とさわらんを 旅館りょかん屋やをまら紙木賃しきひんとこうびとこうび とくにり事ことわ

十一 やんぢや湯

今いま小兒こどもの 我われ僕ぱくふ物ものをうひ ひうちるをやんぢやんと お彼かれ傍そばを添そなへてやんぢや湯ゆと古いきくのり

江戸廣小路 延宝六年刻 不ト撰

二火三火蓬よしのがりとの やんぢや湯 言水

富士石 延宝七

十二 これらん湯

のう高糞珠たかくずしゅ西丸にしまるのきひやわたりや湯 一 益

元吉原の瀆ぬきよりの流言りうげんおでられん湯ゆとふと 仰あおり是これは遊女ゆうじょの誰だれされ金銀きんぎんをさら
そ湯ゆとくに意おもすり。又またおん湯ゆとくに是これは是これは友ともとく客きゃくの方ほうへ金銀きんぎんとそそ湯ゆをまん
とむるハ語勢ごせい。故ゆゑかうり湯ゆとくに事こと下くだふやまくまく或もハ。そぞやん湯ゆ或もそぞ
れん湯ゆと言訛音ごゑいん便びんをそまくまくかのひ自他じとうの混まトと底そこもアキあきど其原そのはら
そりまく湯ゆとそぞ湯ゆの二ふたそり。まづ古いきくそえふ事ことより 秋あき原はら吉原細見記

所作物語

豊林子藏書

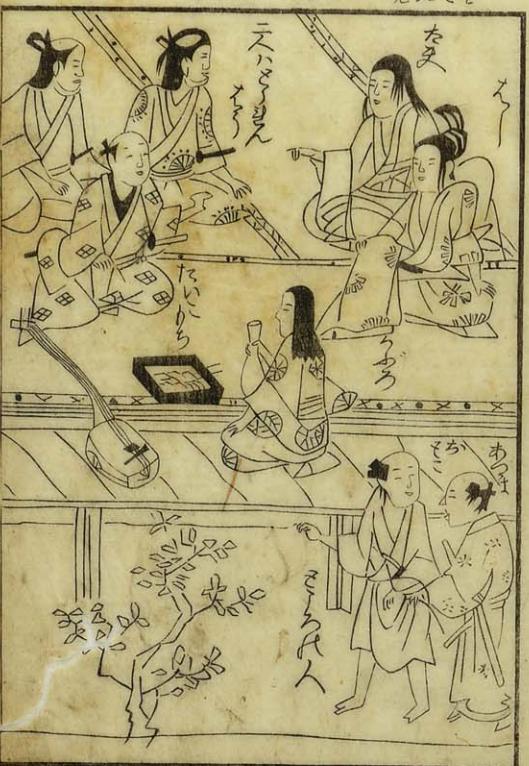
元禄實承九年

目録ふ

これらん湯ゆの事こと。たゞと持ものタタと並ながせ

やうれつ金の向るやどせらん。今後いかうを桶伏とあれ。（ひきふ）とく往あと載て左の圖。

昔ハ草稿と
京の筆せそ
夥一ア此
草紙の板元
おもや
清美房
とゆの一條
通鳥丸多
事色音論
不えさり
桜作者と
色音論と
同人



色音論

寛永九

年印本下の巻

「おうが心も吉原も一八なうの女らうの肌あく白きう」

小袖

「おうが心も吉原も一八なうの女らうの肌あく白きう」

とく往あと載て左の圖。

色音論

寛永九

年印本下の巻

「おうが心も吉原も一八なうの女らうの肌あく白きう」

色音論

寛文七

年刻

「おうが心も吉原も一八なうの女らうの肌あく白きう」

吉原讃嘲記

寛文七

年刻

「おうが心も吉原も一八なうの女らうの肌あく白きう」

答て曰。

女郎の匂へ金銀をとるん湯をりたむ」とあり前からよく當時より名自他の混トる故此語釋あり。もの取の假字初音といふよりれてかく書しより

吉原大難書

延宝三
年刻

八橋さまを油

ませばたと小袖のちうーあもかまつたと

を絶せつたりともつゞ殿

ちからりとをありの立姿

まづれん湯が白糸のよきつ

りつ結ぶ縁

ふどうの事あり此やう

縹画尽。焚香集。松の葉

りつ結ぶ縁

ふどうの草紙かええ

れど同事られば皆略く

又姥櫻

桙勝年号

かやりもこの道具持

おとこ馬

のをミ物。を敷そな物。そな物。これらは唐僧の名とぞうえ」と有る花

街の事を知る者を嘲る詞也。假。さうの二させり。又日本莊子

元禄十

四年刻

ふ廿歳の夏より色ふ浮名と假まん傍

とぞり山谷の云々の身小舟を駆るを

此草紙の三歌を字ゆて書り作者都の錦

別人文流おろす者。自他を謬

ちざき狂歌ふ詠

ト養集のやうの未見能譜の匂もまくら

いは

續山の井

寛文七年刻 李吟撰

京三吟

延宝六年刻

児搗

我

心

城

そ

られん

や

越前

古

丟

仙庵

ち夫の姿

隠

失

けを

仙庵

ま

捨

て

信

德

二本とも撰者の京より古云へ越前をりされば此流言寛文の頃より何處かても
ゆづてゐまづ。又大冬舞の小歌ふ東觀山の小搗湯。金龍山のそられん湯
と云ふ事なり上野の花の名所なり。搗の實を。さくえ湯との余より小搗湯と人名の
やうゆひだ。金龍山の花街の通ひ路ある故それ湯と對あるあらゆる

昔ハ庚申と信する者あとふ多かり。故あ、庚申の日あく七色菓子販賣本

是り當時の人は七色賣とあり 庚申秘録 ゆもとそよる如く七種の供物とて
ゆうて祭り法あり。それを表しての物をうるを世説愚案回答 寛保二年刻 旨

庚申の七色。甲子の七色とすも目一錢少七色の供物を賣らる其調へぐれ
干菓子砂糖大豆せんべい様の物を調ふ。さて供物の柄へぐれ或へ高麗麻せんべい

かれべ けらる形をこゝへ小き箱入の文匣ると小仕切とて供物とへぐれ
絵の仕様があふ記を圖の如く。外ふ袋販布小錢をられ持



すまわり。又箱の中仕切りと大きくて浅を入れもあり。是
も後ふ紙より紙ふせむやくふなりと後程より賣せし以上愚
あふじかく今ふ店來賣る。備前をもとく有ふ記。如く七色菓子の庚申

の供物をだや先禄菓より大黒やも備へ今ふ童の天滿宮ふ供むる物とのと思ふ
もがく 五難組の類へ庚申 そもそも青面金剛ふ七の数と用ひ事道家の事より更
きり本朝やも慈福和尚の七さるの歌。古書と探らば種くらゐ。今庚申の日
のやぢちで渋紙と金むさきと七庚申つづりありと婦女のひきうちつるも七の数
きり是と一度也とくらゐあは七所の渋紙とりぞり事へを。初て渋紙どくむ
者うる事どすの證りあはんと手巻のひり。さて七色菓子との変えを古くいふを

暮繁集

万治三年刻常辰撰

洛陽集

延宝八年刻

七種の庚申ふ 七種や七味の菓子ふかのえ申 重以
わちたるど 七色菓子をひるるべ

庚申夜 一説ふ七色賣や 呪子鳥自悅
まことひ 呪子鳥りとひ説 下学集 駄馬の金裁
神

又 凤流義の浮橋 ふ 京新在家の事とひ象ふ

毎月七日庚申の日七色菓子の賣声もかちくあらひの事よりは草紙年号とて

○又天王寺の庚申少ても詠日お彼七色菓子を賣へ事なり是も價一文なり

天王寺伽藍記

明暦方治

頃印本欣

庚申堂の像

聖母也

御持御てなり是法也。又鵺のつまゝの鷲

七ツ八声をかとあるを心なり。又菓子と一錢ふ七色賣へ心一念の信心ぞりて云々

又難波鑑

延宝八年刻

六の卷

天王寺の庚申の諸國の本寺より潤ゆる年も七庚申

あり略ひな納め庚申もうやよと群集しく十二燈

とよがらる声も喧く七色の



菓子もいがく云ふとて此圖あり童の相とかへ著を持てんす
愚梅向答 ふりふよ合ひ。金とくも七色賣ハ芦分船

延宝二年著

同三年刻

天王寺名所彼岸櫻

貞享二年刻

庚申堂

七色の難題

姫が思ひや歌ふ詠

正友

梅るふ童話お照天姫ふ一文の錢をとひ是を多七色の物を買ひされと雅題をひひ

おこひまふ歌と諺ーとひ事あれ此とも彼七色と一文を賣へ事をひひへや又

古淨猫宿

どひの判官

間印本

お照天姫。人買ひのあふ羨濃園青門墓の長がりひと

賣へひとされ流れをなきすと遊女ふ事

長憤り。六ヶ所の金の下の苦事大消せば

やうふ林火。十八町の事ある清水を七桶くみたれよると姫の雅題となりひからう象

長ひるふも心を見へと解ひ足七文取ひ。ひうふ小糸ひもこなきと云此解足ゆでぞ

き。せんさん。うぐりを。かぢりを。かくらう。いぢト。こそ。やの夜のつれどと。買ひて

うちれ一色邊ふりのあらん流れをうると思ふべ。ひさすへや照天の娘。料是と傳
氣。ふくさきどこそ、ゆゑまれあき。圓あらすし其時の序時のうちお自身の歌と縁り
あらやめのとふ至るまで唐名とうけでゆりけよかくさりゆれば智恵のかもんりを
しゆや唐名も亡れまよ。いだまことある一継心。是こそやまとき唐名とそくお買様
長着殿ふ奉る。もう一番ふ。さう見えど。春のそぞらめのつぶ。せうろんと。サ行の事。
うこもとと。山草。かひもとと。野老もと。うらうと。海老の事。いちどときて。ひと
りうう。備。暗の夜のつれ男。のむらひなきの秋。こむらとく。流れをゆく。こま
まれや。長者此由浮覽。じゆくままふ此娘へ。いる者と聞えて。ゆく情をかけて
つるんと十六人の下の水仕。わらひよなうとおひから。情をかけてつるく」と見え
れば是ふよりる欲。されかくまれ七色菓子の匂うる事。論。えふ。あまねきの
今説。津守らふ。傍ら一歳のうつれ男。えねぬ田代よ
ひまもの事。ひざきあく」と語りもの不う異同ありとぞ

○因ふ記難談と見流し。瀧谷道玄坂をのぞり三町茶屋への路。中因志の
うちうべ。右の方小高き地。小冰川明神の社。其左は延室八度中年と彌る
彼青面金剛の石像へ。堂との程やむらぬ仮の兩覆ひと。浮世袋ふくと
猿汲沟。うが納めゆつゝを十年なり。三町小風うり
〔出東前京土産 寛文四年作 ふ
三條通大橋東。白河橋より多々東。三申の社。うら
あらうき浮世袋をうけ。色トキ小袖きせ。十二燈洗米井供ふと備ふ」とゆふ合
考。またふうかゆ。浮世袋の事のみと若彼括様も庚申本をさむる。原をそれが漫
畫。うらうき。移一鉢と思ふ。友人曰眞言の壇門。俗ふらの金剛欄柱を掛る金剛
寶幢。とく。物あり。安祥寺の錦をそて火形をかきり。二角小龜。裏小香どく。又ね
浮世袋。其形。似。故寶幢あるせうて神佛ふき。ぐるあべ。此説ふよれば
金剛の名ふ因て浮世袋も庚申本納め。起原あわく。

十四 誰袖 花袋

誰袖ハ匂ひ袋なり組とげて二つ連ひ今被落トロヌ物の如くして持故古画
の誰袖小紐のつゞぎなる。是ハ原「色うちも香とそなれとおもなれ誰袖あれ宿
乃梅を」とらふ古今集の歌坐て名。テ一多れ楊枝さへとろやそハ名義穿え
かく香具屋も持來。見世店あても賣へる。誰袖と匂ひ袋なりと云ふ証々く
ゆき其三四を記す。老鑒物語 實文四
そぞら見世相あがむまば。がむらたててる小寫物のあく。ひと愛らへんにいける印説
巾着。針ざり櫛がうだ。誰袖。氣へ少しの具。大梅花をう云々 又ト養狂考集小
犬の誰袖ふるをそぞと引こころをかへる。天和二年の写本。小異あり
か然て勢あわひもぬ。たゞ袖とひけども君を大のつゝか

同集

ホ又

若き香具屋あならて日々の香具をひしりける。略伽羅。たゞ袖。花の露。い

袋などひりとのひれば云々

女重宝記 元禄五

匂袋 誰袖

匂玉 香包

けのひん

古紋所帳 元禄年制

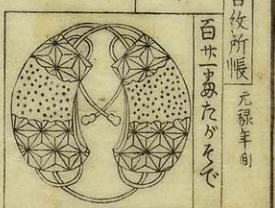
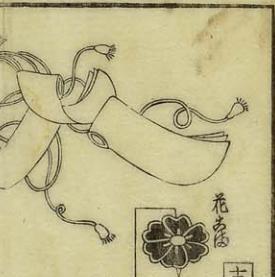
百枚あまたがそで

丹前紋

京井村勝吉画

室水元年刻

宝海角文筆



延寶雛形

甲寅こうとうトア
二年入

四季模様

一名

諸禮

繪鑑

菱川筆

天和年間

印本

小寫物畫の
荷へ

かぎの画本
見えする圖

水本辰之助

陽京の事

あら

かぎの画本
見えする圖

水本辰之助

陽京の事

あら

元禄十一年秋

是等の圖がりやう。又香のかどア元禄八年刻ふ「梅花黒方などたき物。麝麝香。
龍腦の誰袖云々」入宝の市と題する樂山縣の前句附。桂木との者の匂ふ
梅ヶ香の誰袖捨る霜の朝」と云ふ元禄十六年分より匂ひ袋を事よく呼也。是小名をそ
思ふ。今婦女子の細工物と云ふ大方香囊多べ。まづ貝張の香貝欽年中定
例記 之田記 正月十一日の魚御所の沖あげ。おき板。おきのこ。匂貝已下
様（も同前）とゆり。羽子板羽根。貝張と云ふ程の事と少む匂貝の事は是
より古くゆきらん。貝張と云ふ物近き草紙（も）かわら見えぞ

向之圖 延宝八

汝干 張子貝々や千源乃錦の浦 調南

此匂貝張とのいへうべ。又花形の獨樂も原ハ香囊を花袋とのいへ物があらう
也。花袋の匂ハ万治前後の繪書（もと）がやうに毎ひらしき証（し）と云べきを二句錄（く）

花月年句 慶安二年刻 立園門

匂ふらゝ山懷の花やく絢 卍和

誘心集 宽文十三年刻 改元延宝紀年へ

種寛葉

かけ香欵草乃被の花袋 一春

花袋の匂袋多う事明あり。再検（もと）す小浮世袋も匂袋多べ。三角小縫て
組（くみ）とつける匂袋の看板近年をゆり。今も跡（あとは）ある。然不知。若ふらり誰袖の彼立角う形
も見うつたる故それと精工がある。備。少女の足等の物と調（あつ）だらむ。把針
も業をもくろんあすれば費をいひて香類（こうるい）を貰ふ事うら。誰袖ハ楊枝（ようじ）
と云。花袋の獨樂（ひとりごと）とあひ。香貝（かわら）のがらくことの物のやうふる。浮世袋の何とも
名づけ難き物となるやうであらん。浮世袋の少女のあらうびふ縫（ぬい）ーと云證（し）

富士石 延宝九

衣配　女の童うき世袋や衣配で友也
歳暮の匂えれば肩蘿袋の料あ送るをり一歌

嵐山集 慶安四

花々のつやみへうき世袋うみ 作者不知

次句後砂金袋
かみ上の五文字
咲花のトアリ

玉色箱 延宝四

見えバ氣のうきよ袋や花袋 香屋

茶の匂ひ花の香とくと匂袋をひり一歌。後の匂の香囊三ツ並てひり
後録へと後勘ふ備ふ。代下りあも浮世袋の匂ふれても考証ふ便る一故少略く
○毛吹草 附合指南ふ「袋」。傘弓浮世。乞食と見えど寛永より
浮世袋をり。金袋弓袋。浮世袋。又世話盡。美濃同指南ふ「浮世」。月蝕。
申着。戯女と記す。美應より浮世巾着と云ふ物あ。浮世巾着名桔梗

袋と云ふ物の類あらゆるを浮世袋と別物名べ

[十五] 土手節 加賀節

昔ニ谷通ひまゐる者の歌ひへふよ節と云ふ今傳する踊で歌吉原雀ふ。それ
編成もそぞおけ云云と云ふの象の如前より此吉原雀の歌初て作り出へと云
當時三張の高木原富翁の歌ひへと見られ。やがて流行せり去き節とそ
うかうめとをなされ一歌を六年の生接。翁は家元を父翁の門人の門人小林某文化
丙寅の二月ちで予が合璧ふ住。あひき節を彈歌ふ歌はふせへて唱歌でニッテ
立交もとを一歌へ松の葉。この巻おぞえするニ谷飯りとくさうき歌せあくゆゆれ
か大同小異あれがちふ不載其二歌

○前日ハ面白かくさう今日ハごとやう物淋し。よつと呼ふやう。あひきん
城招き。ほんどうりき物がある。何ダ。一口茄子ふ紅のはのとをあひて

事。何所へ船宿へあらてきと可の船宿を思ひて分別へる。林々からもく

えあやうきもさうくよサ。とかく懸跡へ氣がりある。

○前夜色里でよせら小歌をみらす。ゆきアまくはるをかみが中のこころを
忘れはすとぞ、ゆるべられとぞ書面で世間へだされまへ出口へからくまの義理も諸
分も此通りめんがくろくかんおやりまくさるによサ。以下前二同

野俗を唱歌るも古雅る。此りつゝもあをびんとい人事不解歌人小向也
不知近曾与風ありふ。とつみが錦摘り写本 吉原利く草 宝永年間
茶屋のあこり。茶屋者も。錦摘りたり。錦つゝも。比丘尼かさりも」とい
事なり。着すびん。孺子鬢。そ。比丘尼の事もべ。孺子の頭巾と鬢を替わると
ひ意もそ隠一召すがふるとかももる。此二歌あらき草紙を未見

雜話聞見録

文化年間編
作者不和写本

え縁の源もよしーづきぬーといふ歌

○やべ色里でもやる小節をよりて後うとういかぢえんじか中の小節を忘
きてこそくらべて書てりしよ。とぞ。おきとさんと落いと義理も落分
も此通り面目あひ。一に茄子の喰きふ紅のつぶと落い。そこ。船宿へ
おいで居た。でぐ不ざむを智恵を分別せばのやうと

とく歌を載りて予がおなき二歌を混じて次節も歌ひう次第又次歌とく

武藏曲

天和二年刻 千春撰

道世の余所小妻子とのぞき見て 芭蕉

つぎゆ 耳小残ふ吉原 峡水

又吉原の草

貞享二年間作 元禄二年刻 小

かぢ。つぎゆの小歌を色糸よ弾うてと
お事もとれ吉原を多く流行一小歌も事へ明れど精細未考

洞房語園

小載

卷之三

の二弦きみせんの令れい。名なへひととくてまよぐよ歌うたひうたひの歎かな。

○もふ引ひきつづく草くさ。つづぎ節ぶと並ながべながべ。かか節ぶは誰だとも知しる其角そのつばの撰うが。

虛栗集

小天和三年

二谷吟行 詩シ波加賀は小やもとや 蛙アマガう郎ロウ 楓カエデ奥ヲ

とあらうどり吉原のよしはらのそのちやり小歌こかげと思おもふ人もゆるめれど是ぜもぐくゆくも

歌うたひうたひ易やすきやす昔むかし物語ものがたり

小六七十年以前享保八年より七十年の昔むかし。祿宜町ろくぎょいちょうの狂言

座中ざゆう村勘むらかん三郎座さんろうざ少すくな多おお門底もんそこ大おお多おおの野の良らう。出來でぬでぬ小こぎぎし。花井文はい三郎

玉村吉孫たまむらきちぞう。玉川主膳たまがわしゆぜん是これ等らかられき美男うつくしおとこ。相子あいこの妻め貴松きくま

声こゑトとき者もの。是これ等ら寄よ食くを加賀かが節ぶととう歌うたをくらくら出だを中なか歌うたを引ひききる。梅うめ

妻め貴松きくま。是これ等ら長歌ながうたも此こ者ものを作つくり出だく。梅うめ妻めの事こと下した卷まき下した印いん本ほん。此こ者ものをあらまきるあらまきると防さへく譲譲り此こ者もの。

説せつふよれば加賀かが節ぶいかぶき者の歌うたひ出だく。國町くにまちの沙汰さた延宝三えんぽうさん小。隅田川すみだがわ名な船

所ところの事ことをりふ余の此こ須すきすええ所ところ猪いの都とく座ざ少すくな多おお座ざととそのせ近ちか江えうちうち

紫し檀たんの三味線さんみせん金きんの鶴つる目めのうきうきく小こ丑うしな色いろ。芦あしるの舟ふね乃のささをがわわな船

音おとトと銀ぎんのかせ掛かけ。誰だもかかく氣色けいせきもかかく。撥音はくおんけごくかやささく彈たん豆とう。

其室そと蟬せんの既きをかかて移人うきじんががのかかのくくやととくくか。賀か節ぶへききとも清川きよかわの

流ながきの水みずを酌くわーかかと物ものもくく。ととゆそを注そそふ「かかががああととああううととりりとと今いまふ廢あきらららががふふ大事おおこと」ととああらら延宝二えんぽうに年ね小こ事ことととああららとと仰あららおおとと廣覽文

中のなか小歌こかげを減へ取とるべ。又また天和笑てんわわらわ集しゆ二に年ね堺町さかいまちの事ことをり余の法師はつし沙門さもん

此道しどう小こづづよよらら合あ智ち学がく智ち失うしな中なか略りやく諸經しょきょうとと高たかの音おと声こゑをひきき。

ららううささるるかか賀がぶぶ。ささんさんががううややののここううももるるき。ちちややうう小こ歌うたをうううねねのの葉は葉はのの裏うら。

又また近ちかく京大坂茶屋雀きょうだいざかぢゃやさく六年六年ふ。おおややままの歌うた小こ音おとの名な寄より其そのうちうち不ふののせせ節ぶ。

加賀節。さんさ節。ほこのえ節。云々と仰ぎばあふりか如くづくても秋ひ

あり。又西鶴名云屋元禄下連節のやう。を加賀」といふ事。ひの元禄の頃の節も

一夏あるるべ。備。加賀節の唱歌へ松の葉。讀松の葉。

されば録せむ。又紫本焼屋廉子を名。洞房語園等。も加賀節の事。ひ

[十六] 貸屋の看板

昔の貸屋。お看板。將某茶の駒の形。お看板。細。板。板の。うち。お貸札の
及古。紙の塵。なきの如く。束。方物。其板をかた。事止。後。彼塵をま
わき。する物。との。是。は。京師。古今。も。傍。り。と。傍。り。ま。故。そ。ら。近。き。か。る。草紙
の。画。や。も。そ。り。く。見。れ。ど。板札を。か。き。た。と。繕。り。或。人。の。日。昔。ハ。謎。語。の。や。う。あ
る。看板。あ。や。く。あ。り。將。甘。茶。駒。の。形。ま。り。金。ふ。う。金。銀。ふ。か。る。あ。ど。く。意。あ。う。ん。放。と。
予。二。十。年。前。友。人の。家。ま。で。來。の。看。板。を。写。一。あ。き。ら。縮。圖。一。左。不。出。を。

貸

志ちや

佐野町まつ月

七す六分 縦三中八寸三分

横六す六分 板ノ原市一寸

志ちや

佐野町まつ月

上野町まつ月

享保年間の画卷

○請

書

かる時の

地名良ふけ圖

印

五

印

五

印

九

印

九

享保年間印本

道外百人一首

近藤清春画

用捨箱中廿三

野傾咲分色

四の巻本

此圖

九



京都板の色付小圖のと見れば此看板江戸小笠原より出物と云
 画巻の紙を
 下へけくろ軒へひまく約る故、出入人の天窓をくわせの用心款、質屋の夏古屋を
 あまこさまやく胡粉を、白く隈びりと、他圖少く今も質屋の看板種くあり圖と
 説するもあれど考へ足らずゆ名様ふ不載

十七 鎮鉢屋の金魚

江戸康子貞享四年小金魚屋。下谷池之端。あんじう屋重太郎のと記。又同所小

地張りなる屋。あらう處市販石墨の而れ重太郎も原の烟管屋をあらえ

向之圖 延宝八

納涼

影涼一金魚の光り鎮鉢屋

調査

延宝中より名高き金魚商人をうへ事此句を知り。西鶴室云産元禄六年印本二の巻ふ

上野の橋云黒門より池の端をゆむふ法渝屋市を経つとぞ隠れき金魚銀
 魚を賣者ゆり庭小生舟七八十も並べて洒水清く浮藻漂とれるる潛て深き
 との事ゆり西雀の羅波人あるがゆる名をゆ誤り。然今へる商人の住難き敷糸花の地とあまきり

再云此室云産の目録ふ「金魚が在言も多」ことの事ゆり。是より前元禄紀年
 未刊行せし「風流盛衰記」ふ「又の日の金魚を生舟からぬ在言をうそをけらる是もつひ

水ふるーと」との事又ゆり。極る金魚の狂言と云ふ魚水中ふ寃轉一踊り狂
き事う。今柔を極る者狂ひゆーと花形の變ざると爲めがゆるといへ類
あらん此事發々古く見ゆら左抄出

新續大鏡波集

万治三年季吟撰
寛文七年刻

さむるや狂言金勇秋乃水

松浦

十八 物城賞て伽羅維といふ

廿の伽羅を愛する事今ふ過る甚故小畜るき物を貰るやも伽羅維といふ事
最かやし子が幼ちろの老人也。今の俗。世事を云ふ事ど。伽羅維を云ふ。世事
者ど。伽羅維者と云ふのり。思ふ伽羅維小方清。伽羅休慶も云ふ廿の帮
間も自松少ゆき。さる意を初に他より名づけらるべ。備。伽羅維との御古く
聞えくらへ鳥籠物語

正保年間著写本 五是もやで云き御代や名と上をひく下さまの

安らぎをもと心さん實ゆりがまき物語りが人のもとをアヌベキ伽羅維の道をや
譽あらうとゆり。伽羅の道ハ正き道。直る道といふ程の事なり

延宝六年

露言歲日帳

此々 富士石 ふみゆり

國厚う千代のつやあり伽羅の春 露言

玉の春と云ふを伽羅維あからう。國厚うと云れば正き春といふ意をもつてゐる歟

貝わやひ 寛文十二年 松尾宗房撰

あやひゆる声や伽羅維筋うひ初 三木

程拍子のうひうる節歌のうす箇

隱蓑

延宝五

立姿世人の伽羅維よひ乃春 芭蘭

袖あれーひとの伽羅様梅の花 かう野

容貌の艶うる波加羅様をくわうが當時の女詞歌の作者のれも女うり世

界といふも又昔の流言。世界か又とゆらまどといふ意なり。又 貞女白毫垢

貞享三

年印本

五の巻ふ「何某の定村といふなり妻室の同家の息女。又外ふありひめを隠して

通ひ、妻の女房恨むる事也。此後妻を本宅ふられてひきのてあせどもあや

恨みど下つゝの男女へひがひの幽心やうをかへとゞと心ある人を物の種

こそうりれ實梅檀の若生かると感トなる。是より本妻を伽羅の御方と

いもう。妻女の名を抱燈翁と欺く引ゆけられて光り輝くこと事もべ」ちふ

約燈翁の詰釋をひく本妻の異名を詰釋をひとと目すふ昔人や伽羅の方

とらひて操正へ心直る事とぞもあく。古き草紙ふ伽羅の攝。伽羅の下駄

きの事ゆり足も准賞へるまじを。俗語ふひる。結構云構。結構云下駄も。

伽羅落。伽羅牛房も昔よりの名きべし今香ひるき物を伽羅といふをざる歟

十九 师走坊主

近松門左衛作の夕暮の淨瑠璃ハ「傾城阿波の陽戸」と題す。吉田屋乃段。

伊を清つの詞ふ「紙衣さすりうち物らへり」引くを破れる極めを跡ふあらむと坊主

あらむと浪人」とゆづ婆やくへく便りあげある者をさて師走坊主。あらむ

浪人といふ説の昔あり一故ふかくでけて書きうるあり金や僧の物うらふ事

考をもとども歳をやはさる事もろきどり

落花集 寛文十一年刻 以仙撰

佛名 佛名を唱ひの師走坊主 ウア 勝 正

此説の實の僧の事をもあふ記へる。と日坊主をどりふとも違ひ。今淨瑠

瑠本來師走坊主との事へ略てる

用捨箱中之巻早



用捨箱中之巻早

正木

二二二